



霜柱妻は言葉の要らぬ世へ
 白梅や命に節ふしのやうなもの
 髑髏むくろみな化粧し合ひて冬日向
 大仏に火照の頬や野火熾ん
 屋根裏に己が屍かろうと櫃こ雪深し
 リュック背負ひて三月といふ港
 凍大根星の碎ける音幽か
 今日あたり春の隣に居るらしき
 変革の時や氷柱の一滴も
 雪晴の怒濤南蛮えびまつ赤
 立春大吉身長伸びる音微か
 春立つや礼拝堂に銃弾痕
 立春や鹿の皮より油垂れ
 縄文の風にあらんや幻魚干す
 寒林を抜けたる川の揺ぎなし

*

円城寺 龍
 奥山源 丘
 金子圭 子
 古畑恒 雄
 佐藤 健
 酒井和 子
 久根美和 子
 宮地良 彦
 窪田英 治
 清水美智 子
 中溝玲 子
 ビュニャールしづ子
 五味真穂
 幹 自 聲
 関 園 子

ほつほつと息穴の開く雪解かな
 誕生日は母想ふ日よ笹子鳴く
 難破船のごとく蝶の煮凝りぬ
 囀や嵐の如き風邪を引き
 雪女獣臭きを好きと言ふ
 思ひ込み強きをとこや実千両
 波音やランプの宿の冬銀河
 夕空の色のぬけゆく寒さかな
 飯蛸を騙し釣りして喰ひけり
 手毬唄言葉は音に戻りゆき
 寝転べば土筆は人の師となれり
 おぼろ月銀器おつとり使ひけり
 一里一尺干鰯のもどし加減かな
 木枯しや枕灯の鬱金色
 湖凍り遠くの街の近づけり

木村由里子
 野口美智子
 佐藤由美
 曦 達 久
 佐藤詔子
 瀬戸柚月
 玉井利之
 上條忠昭
 塚原白里
 中澤良子
 増田義幸
 中岡草人
 荻原昭廣
 翠川逸明
 林 千代子

岳俳句・拓くことば 四月

(452)

宮坂 静生

はじめに。日常ふと気付いたことばをメモしておきたい。これはおもしろいと感じた着想は、思い出せるように一言説明を加えたり、図示しておくこと。作句も取材が大切。

霜柱と妻の死、地へ還る

霜柱妻は言葉の要らぬ世へ 円城寺 龍

霜柱を上五に冠せたことで、地に還られた妻の終焉をきわめておだやかに追悼している。哀切この上ない思いを抑えに抑えて、大きな自然に抱かれ一生を終えた妻の死をこれでよかったのだと首肯しているように思う。「言葉の要らぬ世へ」とは、祈り。無言のことばのみ通じ合う。俳句の究極がことばを超えた沈黙にあるように、いのちの果はことばを超えている。深悼。

白梅や命に節のやうなもの 奥山 源丘

命は生物学上の生命とも人文学的な一生、生涯とも解される。後者の意だと人生に「節のやうなもの」があるのは当然。こゝはからだと精神とを一体化した身体上の命か。命は只、棒のようなものではなく、生命力にも節があるとみた。

う。ことばを無理しないで、連想の翼を拡げるのが巧みな作者。

凍大根星の碎ける音幽か 久根美和子

大根を凍ませて煮物などに重宝する「凍大根」をつくる。寒中、天空の星が碎ける音とは流星でもあったものか。高地信州富士見高原の満天の星空を思い描く。天空が軋む音。

今日あたり春の隣に居るらしき 宮地 良彦

宮地虚子誕生。悠々と九十歳を超えられた気持の余裕がないと、読み手をほっとさせるこんな名句は詠めない。寒い日

今月の秀句

髑髏みな化粧し合ひて冬日向 金子 圭子

演劇の舞台を想像した。前衛劇でなくとも、化粧した髑髏は珍しいパフォーマンスではない。あるいは、人間社会を風刺したものか。「どんなに化けても所詮人間は髑髏」とは一休禪師も想起され、究極の姿を思い浮かべることができる。「冬日向」は日向ぼこではない。生存競争の場を指したもの。欧米の風刺劇の舞台（EU連合など）を思いながら、いよいよ到来する御先真闇な今世紀のことかなと、大胆な作に拍手した。

寒さに打克つ凜烈な白梅を思い描きながら、いまが自分にとって大事な結節点と心に決めた一句。どこか草田男の「勇氣こそ地の塩なれや梅真白」を連想する。

大仏に火照の頬や野火熾ん 古畑 恒雄

若草山の山焼の火照が大仏の頬にさしたとは話がうますぎる。そこに奈良の社寺風物を愛する作者のユーモアがある。ぐいぐいと端的に大仏を据えたのがよい。それとない思わせぶりではなく、若い日の修学旅行以来の大仏さま。懐かしい心情はつねに作句の底流にあるものだ。

屋根裏に己が屍櫃雪深し 佐藤 健

福島県檜枝岐村は雪深い山村。真冬にころりと昇天しても柩が間に合わない。そこで、嫁入道具を入れた箱を終焉の柩用に屋根裏に保存してあるという。身につまされる咄だ。

リュック背負ひて三月といふ港 酒井 和子

小学生の春休み、おじいちゃんおばあちゃんのところへリュック背負って泊りに行った子どもの日の回想句か。三月は別れの月、四月の出発を目途に、やすらぎとさみしさがあ

が続き、とある一日、こんな日がある。春待つ心は最高の詩情でもある。

変革の時や氷柱の一滴も 窪田 英治

気持が昂じるとわずかに春めいた兆し、氷柱の一滴にもはっと思いあたることもある。世がいまや「変革の時」というのではなく、自分にいゝきかせたことばであろう。そこにはじめて実感がこもる。節目にあたる一句になろう。

雪晴の怒濤南蛮えびまつ赤 清水美智子

南蛮とはポルトガル、スペインなど大航海時代以来の東南アジアに植民地を持った国。南蛮を冠する語からは大型の渡来物を連想する。構図も明快。白・碧・赤の彩色あざやか。一步踏み出す張りきった句作りに共鳴する。

立春大吉身長伸びる音微か 中溝 玲子

春待つ心の一句。立春と聞いただけで、身の丈が伸びる音がするという。寒い冬を抜け出したい必死の思いが伝わる。

春立つや礼拝堂に銃弾痕 ビュニャール

季語が新鮮。光と翳との対比が見事。私も見た、地中海に臨むマルセイユ港を見下ろす教会の外壁に残された第二次世界大戦の銃弾痕を思い起こした。朝の殺気のような港風景とともに。社会詠に挑戦の作者のひたむきを讃えたい。

拓くことば ⑦ 自句寸言(11)「青木曾」

水草生ふ野川の涯や浄瑠璃寺 昭和41年

「龍膽」(百十八号・昭和四十一年五月号) 特別作品
「花あしび」。名古屋住の宮坂栄一、栄一の姪と三人で室生寺、当麻寺、浄瑠璃寺と三月に長い旅をした。風景句を詠んだ。憧れの浄瑠璃寺へ奈良坂を越え初めて行った。バス行を栄一が決めた。彼は二十代で「白樺」の編集長をやるが、関東大震災で雑誌は廃刊。祖母の弟で、年齢差があり、祖母が親代わり。私は伯父と呼んでいた。奈良から寺まで「野川の涯」の感慨があった。句集『電』所収。

青木曾や積木の隙の走り水 昭和41年

「龍膽」(百二十号・昭和四十一年八月号) 特集木曾。
七月十六、十七日一泊吟行。駒の湯泊。「木曾坂町担ぐ蟻みな強腰に」「霧とぶよ青田孤独の貌ばかり」も同時詠。

上松の檜材置場での作。木曾川へ下る矢のような急湍が胸に飛び込んできた。そそり立つ檜山が被さる谷の町木曾。閉塞感が私は好きだ。以後、木曾の風物は作句意識の底流につねにあった。句集『電』所収。

冬水輪泉の無韻ききてイづ 昭和41年

「龍膽」(百二十二号・昭和四十一年十二月号) 前書に「婚約す」とある。翌年三月春分の日に大澤徳子と結婚。前年、二十九歳の冬、どこの冬泉か覚えがない。婚約中に小谷村の鎌池の辺に佇む写真を彼女から貰った。冬枯の素朴な汀の写真で、心動かされ、私が佇む風に変えて創作した。これがわが作句の嘘の始まり。この背景はいいと思えばそこに物語を創作した。が、ものを見たささやかな感動の片鱗は必ず注入した。句集『電』所収。

山の雨しはぶき走るわらび狩 昭和43年

「鷹」(昭和四十三年八月号) 所載。昭和四十三年六月、梅雨滂沱たる日、白馬山麓親の原高原の山荘で藤田湘子に会う。座光寺亭人、玉木春夫の誘いだった。四年前に始めた「鷹」(「馬酔木」の新人養成誌)に水原秋櫻子のクレームがつき、四十二歳の湘子は苦悶のさなか。「青霧にわが眼ともして何待つや」「蒼く暮れたり郭公をまだ聞きたし」が湘子の当日詠。作句中の自分の取り留めない思いを「わが眼ともして何待つや」と詠う。風景詠専らの私は、この心理詠に衝撃を受けた。咳き込むような雨中での蔵採り詠に素質の良さを讃えられ、「鷹」へ入会。十三年在籍した「若葉」を辞めた。句集『山開』(昭和五十四年八月・鷹俳句会刊) 所収。

立春や鹿の皮より油垂れ 五味 真穂

冬の狩猟の獲物である鹿の皮を外に干す。にじみ出た油が垂れる。きれいごとでなく、そのものに迫ったのがよい。立春を捉えた作者の詩情、美意識も鋭い。

縄文の風にあらんや幻魚干す 幹 自聲

幻魚は縄文以来の魚であろう。進化など考えられない日本海の深海魚で、ぬるぬるつるつるしたゼラチン状の肌と細身の鱈のような魚。私も糸魚川へ行くたびに買ってくる。暗闇に棒といっためったとした感じは地魚の風貌だ。干せば縄文の風が吹く。

寒林を抜けたる川の揺ぎなし 関 園子

風景に寸分の隙がない。花巻の作者なので、北上川の流れであろうか。畏敬の思いで、大自然を捉えている。都会詠の工緻さはないが、大地に生きる者の眼力が伝わる。他に雪嶺集、前山集からの推薦候補作を掲げる。

雪晒し貝殻虫の絞り染 大野今朝子
春の嗽や若き裸身の白樺 細川はじめ
白粥や雪降る音は祖の声 沼井由紀枝
素寒貧とは寒晴のやうなもの 古屋 洸
寒最中約せし如く父母逝けり 小伊藤美保子

鯉の煮凝りが難破船のごとくとは

誕生日は母想ふ日よ笹子鳴く 野口美智子

私を産んでくれた母を回想する。それが誕生日。私が齢を重ねる祝いに誕生ケーキをとった尋常平凡な誕生日ではない。母があって私が産まれた。こんな当然なことを誕生日にいう人は思いが深い。冬の鶯が鳴く清冽な日であったものか。想像の仕方が円満で広くものを見て、過不足ない光景を描くの一日の長がある作者だ。決してぶれない。

難破船のごとく鯉の煮凝りぬ 佐藤 由美

大胆な比喩を地味な鯉の煮凝りに用いた。大きな鯉であった。それにしても、怒濤にもまれ、無惨にも浜にうち上げられた黒い難破船と鯉の煮凝りとを結びつけた腕力は大変なもの。向不見に、これでよいと表現を踏み切った度胸のよさ。初登場の五十代の作者。このところ入会者が多く、作者もその一人。大いに自在に表現してほしい。

囀や嵐の如き風邪を引き 曦 達久

「嵐の如き」の比喩がおゝげさ。そのおゝげさ加減に注目した。早春の晴れた日であったか、囀がしきり。それにしても大風邪を引いた。一句全体のバランスよりもいゝたいことをいゝ、しかも囀のイメージで全体を括る。やりたい放題や

って、これでいゝという手加減を身につけてほしい。ちまちましないで、意味は通る。この調子でいゝ。十七歳の冒険。

雪女 獣臭きを好きと言ふ 佐藤 詔子

雪女の野性味「獣臭き」に意外性あり、意表をつく。雪女は清纯そのものと思っていた。雪女という架空の存在にどこか実体感が生まれた。一つの手柄。

思ひ込み強きをとこや実千両 瀬戸 柚月

男女関係のことへの「思ひ込み」か。一旦思ひ込んだら、状況が変わったにもかかわらず考えを変えない。ちょっと手を焼いている感じ。「実千両」は実直な感じを与える。きちんと整った句だけに、外側の風景から内心の思慮の深さを連想させよう。心理詠が巧みな作者。

波音やランプの宿の冬銀河 玉井 利之

かつて能登半島先端のかくれ家のような宿の話を聞いた。たしかランプの灯りとか。そんなところは冬銀河も美しいか。波音を強調したのが効果的。山宿でなく海の秘境の趣きが物語を想像させよう。

夕空の色のぬけゆく寒さかな 上條 忠昭

夕映が次第に収まり、刻々と夜へむかう。寒い。これ以上

平凡で地味な光景はないが、なかなかの作。古俳句の趣き。さすがに年季の入った作者。

飯蛸を騙し釣りして喰ひけり 塚原 白里

飯蛸といっても飯とは関わりがない。春の卵をもった蛸の胴に飯粒が詰ったようにみえるところからの称。あわれな句。手軽によく釣れるのであろう。老練な作者。なかなか下五が出ない句例か、いく分捨鉢な詠み方に無常が滲む。

手毬唄言葉は音に戻りゆき 中澤 良子

手毬唄の心地よい響きを「音に戻りゆき」といったものか。へあんだ方どこさ、肥後さ、肥後どこさ、熊本さ、熊本どこさ、せんばさ、せんばやまには狸がおってさ、それを猟師が鉄砲で撃ってさの子どもの頃の唄の一節を思い出す。俳句も「言葉は音」、ことばの響きがよくなくてはいけない。極意をいっている。

寝転べば土筆は人の師となれり 増田 義幸

野に寝転べば、顔より上に土筆。土筆を見上げる位置になろう。上にあるものは師との着想がやさしい。初心者でないと思いつかないいういしさに感心した。気持が繊細である。

おぼろ月銀器おつとり使ひけり 中岡 草人

春のおぼろ夜に、銀の器に京の甘味の菓子、あるいはどら焼でも盛ったものか。私の感覚ではいく分の違和があった方がよい。「おつとり」とは、調和のとれた「しっくり」とは反対の感じ。くだけた、こだわりのない自由な感じ。視覚ご不自由の草人さんの晩節の静かな中に、ものにとらわれない自在な、しかも気品ある生き方を思い描くのである。

一里一尺千鱈のもとし加減かな 荻原 昭廣

雪深い一里一尺の地に住まれる作者。戦後は千鱈を常食

今月の秀句

ほつほつと息穴の開く雪解かな 木村由里子

雪解の大地が生きている。生きものの感がおもしろい。雪原に息する穴が開く。蜂巢状の穴か。日にあたり、雪の肌が荒くがさがさしてくる。「ほつほつ」との擬音の軽さ。どこかおかしみがある。雪原が呼吸をしている。それは雪の下の大地の息遣いであろうが、雪の間に小さな呼吸穴を開けて、息を吐出した。雪解だ。眠っていた大地が目覚めたのである。作者は佐久在住の童話作家。どこか童画風。息穴がいゝ。

のようによく食べ、腹の足しにした。焼いたり蒸したり煮たりして。水に漬け塩分を抜きとる「もとし加減」が難しい。漬けすぎると味がなくなり、只、白身の魚肉を噛んでいる感じ。忘れていた暮しの一齣を思い出させて貰った。佳句と思う。

木枯しや枕灯の鬱金色 翠川 逸明

枕火は死者の枕もとに置かれた灯明。「鬱金色」とはあまりにも明るく美しい。死者のためにという配慮であろうが、今日では葬儀屋の設営に任せると枕灯が明るすぎることもある。施主の沈んだ思いなど吹きとばすように営業的にやられたものか。木枯しを配した意図はわかる。あるいは枕灯は生者の灯か。

湖凍り遠くの街の近づけり 林 千代子

ふだんは遠方にある街に凍湖を渡って近道ができることをいったものか。実際湖上を行かなくとも、街とつながった距離感は近く感じる。「遠くの街」のいい方にはへ山のあなたの空遠くへに類した夢やなつかしさがあろう。

岳集からの推薦候補作をあげておきたい。

落の臺郷関といふ重きもの 古畑 恒雄
労きの弛びてゆけり菊根分 村田 朋美